メインシナリオ／サイド第３回
『滅びを望む者たち　第３話』個別リアクション

『生きる望み』

「そうなんだよ～。ぼく、ホントにお散歩してただけなんだよ～。それで突然魔法が使えない部屋に閉じ込められちゃって」
「俺もやけになって、ちと路上で喧嘩をしただけなんだ。相手、大した怪我してねーんだぜ」
「それは怒っても仕方ないぞ」
　トゥーニャ・ルムナや脱走者たちの話を、うんうん頷きながらロスティン・マイカンは聞いていた。
　貴族のロスティンにとって、ここでの暮らしはとてもきつかった。
　狭くて臭く、食事はマズイし、風呂には入れないし、着替えもないし。
　そして、暴言を吐かれたり、暴力を振るわれそうになったり。
　暴力の方は、今のところトゥーニャたち、魔力が高い者達が止めてくれていたため、さほどのことはされていないのだが。
「監禁され、魔力封印されて、苦しかったよな。
　自治権とかは分からないが、再度の交渉や条件引き出しは俺も口添えするぜ」
「うん、ありがと～」
　トゥーニャは信じてもらえたことが嬉しくて、子供の様な屈託のない笑顔を見せた。
　ロスティンとしては、調子の良い事を言って、取り入って守ってもらっているだけなのだが。
　ただ彼等が言っていることが本当ならば、彼等の処遇については少しおかしいと感じてもいた。
　またロスティンはここに来る前に、沢山食べてはならないものについて、教えられている。
　食事に下剤かなにか入れる可能性を考えてのことだろうか……今のところ、その食べ物が届けられたことはない。
「……人生をやり直す気はあるか？」
　食事の提供に訪れていたエイディンが、脱走者たちに問いかけた。
「やり直すっつーかな……」
　脱走者たちは微妙な反応を示した。
「その気があるなら俺と共に箱船を造り、新天地を目指さないか？」
　彼等は生きることを望んでいる。そう感じとり、エイディンは彼等を受け入れ、共に希望を持って歩みたいと思っていた。
　しかし――彼らの反応は予想外だった。
「箱船って領主サマが従順な領民連れて、ここから脱出するために作ってる船だろ？」
「個人で作ろうってのか？　そんな実用性ない船を？」
「俺らに必要なのは……魔法鉱石、そして箱船じゃなくて、俺らだけが乗れる漁船だな！」
　魔力の高い者たちの多くは港町の住民であり、漁業で生活をしてきた者達だ。
　農業の知識があるものもいるだろう。
　海の上に出れば、大地を発見したのなら、むしろ大地を隆起させて降り立ち、生きる希望を抱ける者達。
「火も風も水も、大地も俺らの味方だ」
「悪いが、魔力を感じられないお前や、騎士や町の奴らを救う義理はないぜ。数十人かそこらの魔力の高い魔術師で２千人を助けようなんて無理な話。でもって、地上に出てからもお荷物貴族の生活を支えろなんて、わけわかんねーし、ホンットばかばかしいぜ。俺らは俺らだけを守ればいい」
「海の上は海賊が溢れ返ってるかもしれねぇ。魔力の無い奴は足手まといでしかない」
　魔力が高いということは、魔法の能力、知識に優れているということ。
　魔法具作成の知識まではなくとも、魔力の結晶ともいえる、魔法鉱石の扱いに長けた者たち。
　彼等は、自分達だけならば、領主に従うより地上で生き延びる可能性はあるのだと、言い切った。
「騎士団が土下座してきても、俺は奴らを助けてなんかやらねぇ～」
　言いながら、脱走者の一人がロスティンの肩をポンポンと叩いて、
「お前は筋がありそうだから、俺らの自治と魔法鉱石の提供認めさせてくれたら、仲間にしてやってもいいぜ」
　そう笑ったのだった。
　主に魔力が高く不当な扱いを受けてきたと感じているものこそ、罪の意識は薄いようだった。
　協調性を身につけず、勝手気ままに生きてきた彼らにとって、領主の箱船計画は元々希望ではないようだ。

こちらのリアクションは以下の人物に発行されています。
トゥーニャ・ルムナ
ロスティン・マイカン
エイディン・バルドバル